

修練



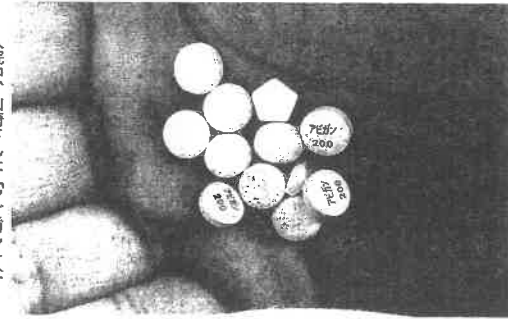
大仙市立協和中学校
生徒指導通信 No. 4

全国的に新型コロナウイルス感染者に対する誹謗・中傷、いわゆる感染者「いじめ」が発生しています。私たちの身近な秋田でも実際に起こっています。あなたはどうか考えますか。

感染責めず対策徹底を

県内では4～5月、新型コロナウイルスの感染発表が続いた。これまでに感染を経験した人や、クラスター（感染者集団）が発生した団体の関係者は「これだけ対策していても感染することはある。感染した人を責めるのではなく、一人一人が気を付けるしかない」と訴える。（三浦ちひろ）

県内コロナ経験者



入院中、山崎さんは「アビガン」などの投薬治療を受けた（本人提供）

マスク、消毒、できること全てやっても…

「誤った情報、人生変える」

大仙市で養育院を営む山崎英さん(57)は4月2日、大仙保健所から濃厚接触者として連絡を受けた。通院していた患者の感染が分かったため、山崎さんを含むスタッフ全員がPCR検査を受けた。結果は陰性だったが「念のため」として約2週間の休業を決めた。

5日朝から喉の痛みと38度超の発熱、寒けがあり、医療機関に連絡。2度目の検査で陽性となり、7日に奥南部の病院に入院した。症状が始めてから3日間ほどは発熱と全身のたろさ止まわないうせきに苦しんだ。特に息苦しさがひどく、少し歩いただけで息切れしたり、病室でシャワーを浴びていると座り込んでしまったというほど。

「マランにも出ていたのに、まさかこの程度で息切れするとは、と思った」と振り返る。病室は個室で、食事が入り口に置かれ、容疑者手洗い捨て。体温や血中酸素濃度は自分で測定して報告する形だったという。検査で肺に影があったことなどから2週間入院した。4月22日に退院し、さらに2週間の自主隔離を経て5月7日から整

骨院を再開した。山崎さんは感染前から常にマスクを着用し、整骨院では一人の治療を終えるごとに手指消毒と器具などの消毒を徹底。患者にもマスク着用と検温、消毒を依頼していた。「できることは全てやっていたので整骨院内では自分一人で済んだと思います」。大仙保健所管内では4月以降に感染者が増え、周辺では不正

確な情報に基く誤謬中傷も飛び交った。山崎さんは「周囲の不安を減らした」との思いから、陽性判明や入院についての情報を会員制交流サイト(SN)で発信してきた。

「県民の命を守るのであれば、行政にはもう少し具体的な説明してほしい。それによって必要な対策が減り、しっかりと対策しようと思えるのではないかと指摘する。最も心を痛めているのが、自身への感染のきっかけとなった患者の存在だ。この患者は飲食店を経営しているが、一店がクラスターが発生したといった誤った情報が広まり、家族にも

強い批判が寄せられた。山崎さんは「誤った情報で中傷するのはとんでもないし、感染した人を責めても何にもならない。対策をしていて感染してしまった人は、加害者ではなく被害者。誤った情報を流すことは、その人の人生まで変えてしまおうという恐ろしいことだ」と強調する。

入院中は「元の生活に戻れなどうか」という不安が強かった。今も接触を避けようとする人はいるが、「再開を待っていた」と花を持って来院してくる患者もいる。「本当にありがたい。仕事をできる幸せを感じている」と語った。

昨年クラスター 県央部の団体 見えない敵、原因絞れず

県央部の団体は昨年11月下旬から、職場内で新型コロナウイルスが発生。同じ建物内の別団体も含め計9人が感染した。事務室内では職員の座席の間にアクリル板、来客対応の窓口にはビニールシートを設置していた。マスク着用や手洗い、消毒の徹底といった基本的な対策も心掛けていた。

団体の出席率による感染が広がったきっかけの一つとして考えられるのが喫煙室。換気扇を回していたが、利用者がマスクを外して会話をしている場面があったという。

この団体ではクラスター発生後、外部の人との打ち合わせは全て事務室外の部屋で行うなど対策を強化した。担当者「ウイルスは目に見えず、対策しているつもりでも感染してしまう。気を引き締めて小まめな対策を続けるしかない」と話した。

秋田魁新報 6月1日より引用

NO! コロナ差別
～感染した方々にはやさしさを
ウイルスと闘うすべての方々に感謝を～